

キルケゴールの読み方—哲学と現実

「哲学学」(哲学文献学 Philosophologie) という言葉がある。哲学の研究が現代の諸問題を哲学的に扱うというよりは、哲学テキストの歴史的・文献的な研究になってしまっている姿を揶揄したものだ。大学で行われる哲学研究の大半が事実、このような哲学史学であり哲学文献学である。確かに、我々がそうした哲学研究から裨益される^{ひえき}ところはとても大きい。しかし、哲学研究者がイコール哲学者というわけではない。キルケゴールの研究も同様の状況にある。それらは、デンマーク語テキストに即してキルケゴールを読み込んだ高度な学問的研究であり、学ぶところも非常に多い。しかし、キルケゴール学者がキルケゴールの良き友、理解者であるとは限らない。

哲学文献学的な読み方は、あくまでテキストに即して「読み込む」(中へと入り込むように読む hineinlesen) という読み方である。しかし、そればかりでは、なかなかキルケゴールの思想を現代化することは難しい。そこで必要になってくる読み方とは、キルケゴールと対話しつつ、彼のテキストから現代の諸問題に生かせるものを「読み取る」(外へと引き出すように読む herauslesen) という読み方である。哲学はそれを学ぶ人間の血肉となってこそ生きてくるものであり、哲学はそれによって万人のための哲学となる。まして実存的な反省を絶えず読者に迫るキルケゴールの著作は、そこから人生を生きる糧となるものを読み取る herauslesen ことにより、自らの生き方の問題として受け止め、現代の諸問題に生かすことができるはずだ。

だが、哲学それ自体が現実問題に対して、直接役立つ処方箋を提供してくれるわけではない。哲学者が政治家として国を治めるというプラトンの理想国家なるものは、全くの幻想である。哲学はむしろ、自ら姿を隠すことによって、人々をその内面において支配もしくは指導することができる。時代の運命を決定するのは、その時代の思想を生んだ人間である。「カントやヘーゲルは幾百万の人びとを支配したが、支配された人びとはカントやヘーゲルを一行も読んだことがなかったし、自分たちがカントやヘーゲルの言う通りになっていたのだということさえ知らなかった⁽¹⁾」と述べたのは、シュヴァイツァーである。これが現実の諸問題に対する哲学のあり方だと言えよう。

倫理学の境位—コロナという不条理に向き合う

哲学というものは自由な思惟の営みである。だから、これを支える根本信念がなければ、人間の思考は糸の切れた風のように無限に拡散していくばかりだろう。とすれば、そのような意味で、哲学とりわけ実践の哲学と言われる倫理学には、思考を拡散させず主体的行動に収斂させ、自由の限界を確定させる前提を定め、また倫理学をして人間の実践と行動の哲学たらしめている生命線がなければならない。

キルケゴールは、『不安の概念』の序論の中で、こうした消息について示唆している。『不安の概念』は人間の罪を巡る心理学的分析を主題とする著作だ。ところが、罪の問題はどの学問的領域にも属さない。そこで心理学は、現実問題として罪があり得ることを、人間の心理分析を通じて明らかにする。しか

るに、罪の理念は教義学が引き受ける課題である。教義学はこれを原罪から解明する。一方、罪がこのようなことを前提としながらも、なおかつ自らが掲げる理想を現実世界へともたらそうとするのが、倫理学である。この理想は決して無際限の自由ではなく、どこまでも限界ある人間的自由である。以上のことから、倫理学は、人間が罪の規定の下に存するものとして、教義学を自らの限界確定のための前提とする。同時に倫理学は、この自由を自らの生命線として、すなわち人間性の証しとして確保し、これを探究するのである。

この著作における罪や原罪の扱いは、きわめてキリスト教的・キルケゴール的である。しかし、我々はなにもそうしたところに囚われる必要はないだろう。これをより一般的な表現で、根本悪とか不条理と名付けてもよい。いずれにせよ、それらは人間が否応なしに巻き込まれ、人間的努力で払うことができないものに他ならないからである。そしてその上で、人間は自らの自由を行使することが求められ、またそのようにして自由を發揮していくのである。

カミュの小説『ペスト』には、巨大な不条理ともいえるペストにさまざまな仕方で立ち向かう人々が登場する。献身的に患者の治療にあたる主人公の医師は、無神論者である。一方で、ペストという不条理の中で信仰を深め、神の手にすべてを委ねたイエズス会神父がいる。そのほか、一度ならずもペスト禍の町を脱出しようとしたが、心を翻して保健隊に志願した新聞記者などもいる。彼らは立場や思想こそ違い、ペストに立ち向かうという一点で、期せずして社会的連帯を果たしていくのである。悪の不条理性にはさまざまな関わりの仕方があり、絶望の狂気に陥った犯罪者すら重要な役回りを担う。『ペスト』は文学作品であり、唯一の「解答」は示さない。

疫病は^{ペスト}猛威を振るい、数多くの人々の命を奪うが、人間の思いとは関係なくやがて衰滅していく。天災は人間の尺度とは一致しない。まさにそれが不条理であるゆえんなのである。ペスト禍に遭遇した人々は、「自ら自由であると信じていたし、しかも、天災というものがあがざり、何びとも決して自由ではありえないのである。」⁽²⁾つまり、人間は自由であって、自由ではない。自由を行使しようとしても、その自由は不意に絶たれてしまう。そんな時でも自由が試される。彼らの自由は、キルケゴールの表現で言えば、罪の規定の下にある人間的自由である。

ペストは現在、新型コロナと置き換えて考えることができる。我々はいま世界的規模で、この恐るべき疫災に直面している。一人ひとりが思想や立場の違いを超え、実践と連帯の生命線としてどこまで人間的自由を生かすことができるか。出口の見えないコロナ疫災のただ中、まさに倫理学において問われているのがこの問題なのである。

[註]

- (1) シュヴァイツァー「文化の頽廃と再建」、『シュヴァイツァー著作集』第6巻、白水社、280頁。
- (2) カミュ『ペスト』宮崎嶺雄訳、新潮文庫(平成16年改訳版)、56頁。